

ちょっと ブレイク しませんか?

第 54 回

赤ひげ (1965年 日本)



イソップ寓話集に「蛙のお医者」と題する小話がある。沼地に住み、掘割に暮らす蛙が、陸に上がって、あらゆる動物にこう言った。

「私は医師である。おそらく誰も知らない、いや、オリュンポスに住まい、神々を癒すパイエオンすら知らないような薬に通じている」すると、狐が言うには「そんなに蒼ざめた自分が救えないのに、どうして他人を治せるのだ」

『赤ひげ』(1965年 日本 原作：山本周五郎著「赤ひげ診療譚」)はベテラン医師と新米医師との師弟愛を描いた。青年医師保本登は3年間の長崎留学を終えて、意気揚々と幕府の御番医になる希望に燃えて江戸に戻る。出世と結婚が約束されたエリートコースのはずが、配置されたのは小石川の施療所であった。納得できない登だが幕府からの辞令であるため何も出来ず、小石川養生所の所長で通称・赤ひげが新出去定に会うために養生所を訪れる。初対面、赤ひげは鋭い眼差しで「お前は今日から見習いとしてここに詰める」と宣告する。登は全く不服で、酒を飲み、御仕着も着ず、怒りをぶちまけて赤ひげの手を焼かせる。危篤状態の蒔絵師の六助の病状を診て、病歴から胃癌だと登が言うと蘭学医学の専門用語「ダイキリイル大機里爾」(脾臓癌)という言葉で赤ひげは「違うぞ。この用語はお前の筆記にもちゃんと使っているぞ」と指摘され、登は絶句。医術といえども全ての病気を治すことは出来ず、その医術の不足を補うのは貧困と無知に対する闘いであると赤ひげは諭し、そして「病気の影には、いつも人間の恐ろしい不幸が隠れている」と語る。六助が死んで、娘おくにから六助の不幸な過去を聞いて登は、改めてその死に顔を見ながら不幸を黙々と耐え抜いた人間の尊さを知り、醜いと感じた自分を恥じた。登は、御仕着を着るようになり、そして赤ひげの往診に同行するようになった。赤ひげは、社会が貧困や無知といった矛盾を生み、人間の命や幸福を奪っていく現実に怒り、貧困と無知さえ何とか出来れば病気の大半は起こらずにすむと語った。ある日長次の一家が鼠取りを食べて一家心中をはかり、養生所に担ぎ込まれてきた。貧しいゆえの所業であったが助かる見込みはなかった。登はもはやかつての不平不満ばかりを並べる人間ではなかった。天野源白の推薦で幕府のお目見得医に決まっていたが、小石川養生所で勤務を続けたいと登は赤ひげと小石川養生所へ続く坂を上りながら、自身の決意を伝える。赤ひげは登に背を向けて小石川養生所の門をくぐっていく。登はその後を追っかけて行く。最初に来た時はこんな処へ押し込められるのかと思った登には、この時には素晴らしい門だと思った。

日本では二人に一人が癌で亡くなっている。一人の生命はこの世で唯一無二の存在で、最期の息をひきとる場面は荘厳である。癌の中でも脾臓癌の予後は厳しい。「赤ひげ」は黒澤明監督と三船敏郎主演で新人教育にも示唆に富む作品だった。ところでイソップが記したような実力不足の医師では困る。現代日本で赤ひげは絶滅危惧種になりつつある。機械は壊れたら新品と取り替えればすむが、人の命ばかりはそうはいかない。



かゆ かわ ゆう へい
粥川 裕平
(精神科医・映画評論家)

名古屋工業大学 名誉教授
かゆかわクリニック院長